

実践報告

児童が道徳的価値に対する認識を広げる道徳科学習 —道徳科の単元化をもとに—

田中 大介*

Moral Studies to Broaden Children's Awareness of Moral Values

- Based on the Unitization of the Moral Studies -

Daisuke TANAKA

【要約】

日常生活に根差すテーマのもと、道徳科授業のいくつかを結び付け、単元として取り扱うことは、児童の道徳的価値に対する認識を広げ、深めるために効果的であると考えられる。そこで本実践では、「よいこと」をテーマとしてあげ、様々な視点から「よいこと」について考える単元を構想した。

【キーワード】 道徳科授業の単元化、テーマ、「よいこと」に対する認識、比較、関連付け

【概要】

道徳的価値に対する認識を広げ、日常生活にいかしていけるような、意義ある道徳科学習にするために、自分たちの生活に根差した課題をテーマとして学習を進めていくことは効果的であると考えられる。田沼(2017)は「道徳教育に課せられた現代的課題の克服を目指すとき、一定のテーマに基づいた小単元による指導効果は計り知れないものがある」¹とし、複数の価値を多時間で取り扱う「パッケージ型ユニット」の有効性を検証している。これは、テーマを設定し、それに関連する価値について複数の教材を紐付けて考えられるように設定するという学習形態である。「生命」「いじめ」「環境」「情報モラル」など、子供たちを取り巻く現代社会における課題は多岐にわたる。それらをテーマとし、解決の方策を考えるためには様々な価値を比較し、関連付け、統合しながら考える必要が生じてくる。現代的課題をテーマと設定して学習を進めていくことが、予測困難な時代を生き抜くために必要な資質・能力を育むための単元構成となると考える。

本研究では、このような「パッケージ型ユニット」をもとにした小単元学習プログラムを措定し、実践の前後での児童の変容を見とることで、その有用性について検討するものとする。

*佐賀大学教育学部附属小学校

第1学年1組 道徳科学習指導案

【日時】令和4年7月21日(木)8:45～9:30 【場所】1年1組教室 【指導者】田中 大介

本授業の主張点【深い学びの児童の姿】

「よいこと」をテーマとして、複数の内容項目を関連付けて単元化することで、児童が多面的・多角的に考えられるように学習を進めます。本時では、登場人物であるおおかみの二つの言動とその意図を比較しつつ、自分と重ね合わせて考えることで、親切な行いのよさについて考えを深める姿をお見せします。

1 単元名 よいことは なんのために するのかな？

2 教材名 おかしく ないかな C(1)規則の尊重 新・みんなのどうとく1 学研

タミーの らくがき A(1)善悪の判断, 自律, 自由と責任 銀河銭湯パンタくん NHK for School

はしの 上の おおかみB(1)親切, 思いやり 新・みんなのどうとく1 学研

3 単元設定の理由

(1) 児童について

本学級の児童に「よいこととはどんなことでしょう。」と尋ねたところ「お手伝いをする事」「人を助けること」「きまりを守ること」といった、具体的な事例をたくさん挙げることができ、日常生活におけるよい行動についてほとんどの児童が認識していると言える。しかしながら、児童の学校生活を見てみると、自分勝手な行動を押し通そうとして友達とけんかをしたり、周りの人に迷惑をかけたことが多く、児童自身が後悔するという場面がよく見られる。自分を客観視することの難しい1年生の時期だからこそ、様々なよい行動や悪い行動について触れ、行動の背景にある意図や理由、自他への影響について考えることが必要であると考え。その中で、よいことと悪いことを適切に判断し、積極的によいことを実践したいという意欲や態度を養いたい。

(2) ねらいとする価値及び単元について

「よいこと」とは、他者への温かい思いやりから生まれてくる自然な行為と捉えている。そのような行為の往還によって、自分と他者との間に信頼が生まれ、温かい人間関係の形成につながる。日常生活において行為の善し悪しを判断する機会は多く、ルールやマナーを守るべきとき、友達とけんかをしそうなど、困っている人を見かけたときなど、その場面も多岐にわたる。しかしながら、常によりことのみを実践するのは難しく、自分の思いだけを優先したり、怒りや焦りに任せて行動したりして、時には他者に迷惑をかけてしまうということもある。そのような人の弱さを理解することも「よいこと」の価値について考えを深めるためには必要である。このようなことを踏まえ、様々な場面を想定でき、「よいこと」について多面的・多角的な視点から考えられるようにするために小単元としての道徳科学習を行うこととした。単元の流れは以下の通りである。

時	1時	2時	3時(本時)
内容項目	規則の尊重	善悪の判断, 自律, 自由と責任	親切, 思いやり
教材	おかしく ないかな	タミーの らくがき	はしの 上の おおかみ
内容及びねらい	公共物を使うときは、周りの人や次に使う人のことを考える、ということの大切さに気づき、約束やきまりを守ろうとする判断力を育てる。	友達と過ごす中で生じる問題行動について共感的に考えることを通して、相手の立場に立った言動を大切にしていこうとする心情を育てる。	相手の立場に立った思いやりある行動は相手だけでなく自分も嬉しくなるということに気づき、思いやりをもって過ごそうという意欲を養う。

(3) 本時の指導について

本時の指導にあたっては次の4点に留意する。1点目は課題形成の工夫である。テーマをもとに、児童自身の経験や、児童が感じた教材に含まれる道徳的な問題を取り上げながら、自分たちなりの問いをもたせ、児童の言葉を整理しながら本時の課題を形成していきたい。2点目は板書の工夫である。本時では、おおかみのとった二つの行動やその意図を横並びに提示していくことで、児童がそれらを比較しながら考えられるようにしたい。3点目は、児童の発言に対する補助発問の工夫である。授業全体を通して児童の発言をつなぎ、切り返し、揺さぶるための補助発問を想定しておき、適宜活用することで、根拠や事例を明確にし、課題に対する納得解を得られるようにしていきたい。4点目は振り返りの工夫である。「自分のこととして考えられたか」「いろいろな人の気持ちになって考えられたか」「これからの自分に生かせそうなことはあったか」という3つの視点から自己の学びを振り返ることで、道徳科としての学びの意味を自覚できるようにしたい。

4 本時の指導 (3 / 3)

(1) ねらい

相手の立場に立った思いやりある行動は相手だけでなく自分も嬉しくなるということに気付き、思いやりをもって過ごそうという意欲を高める。

(2) 評価 (個人内評価)

自己の経験と重ね合わせながら、思いやりある行動のよさについて考えている。

(3) 教材について

おおかみは、他の動物を橋の上で追い返すことでいばっている。ある日、橋の上でくまと出会い、道を譲ろうとするが、くまはおおかみを抱き上げて橋を渡してくれる。次の日、橋の上でうさぎと出会ったおおかみは、うさぎを抱き上げて橋を渡してあげるという話である。おおかみの言動の変容から、いばることと親切にすることの違いを比較して考えることができる。さらにおおかみの変容が他者の行動に端を発していることに気付くことができる。これらのことを踏まえ、親切な言動のよさに気付き、他者のよさを自分に生かそうとする意欲を高めるのに適した教材だと考える。

(4) 展開

学習活動と児童の反応 (□□□□)	教師の主な発問 (○), 働きかけと形成的評価 (◆)
<p>1 自分の経験を想起する。(5分)</p> <p>・落とし物を拾ってくれて嬉しかったよ。</p> <p>・転んだ時に「だいじょうぶ?」って言ってくれて元気になった。</p> <p>2 「はしの上のおおかみ」を読んで、今日の課題を考える。(10分)</p> <p>・最初はいばっててだめだと思う。</p> <p>・おおかみは優しくなったよ。</p> <p>・くまがすごいなあと思った。</p> <p>・おおかみが変わったのはどうしてだろう。</p> <p>・えへん、へん。が2回でてきた。</p> <p>・人に優しくするのはどうしてかな。</p>	<p>○「人に優しくしてもらったことはありますか。」</p> <p>1 自分の生活経験を想起させ、優しくしてもらった時の気持ちを考えることに加え、逆に優しくされなかった時の気持ちも聞くことで、優しくすることの意義について考えられるようにする。</p> <p>2-(1) 「今日はおおかみが変わります。」と伝えてから範読することで、おおかみの変容に着目して考えられるようにする。</p> <p>○「お話を読んで、どう思いましたか。」</p> <p>2-(2) 児童の感想を話し合わせながらキーワードを整理することで、本時の課題形成につなげる。</p> <p>○「今日みんなで話し合いたいことは何ですか。」</p> <p>2-(3) 児童が読後にもった問いを確認しながら順序立てることで、児童一人一人の問いが本時に位置付くようにするとともに、学習の見通しをもつことができるようにする。</p>
<p>やさしく することの よさは なんだろう。</p>	
<p>3 教材について考える。(15分)</p> <p>(1) 2つの「えへん、へん。」について考える。</p> <p>・1つ目はいばっててだめ。</p> <p>・2つ目はうさぎのことを考えてるから、優しいと思う。</p> <p>・同じ言葉でも、ちがうんだよ。</p> <p>(2) どうしておおかみが変わったのか考える。</p> <p>・くまに親切にしてもらったから。</p> <p>・自分もくまみたいになりたいと思ったんじゃないかな。</p> <p>4 自分のことを振り返る。(5分)</p> <p>・泣いている子に声をかけたよ。</p> <p>・消しゴムを貸してあげたよ。</p> <p>・親切にすると気持ちいいね。</p> <p>5 単元を振り返る。(10分)</p> <p>・よいことをするのは、みんなが気持ちよく過ごすためだよ。</p> <p>・よいことをしていきたいな。</p>	<p>○『2つの「えへん、へん。」のちがいは何でしょうか。』</p> <p>3-(1) 2つの言動を横並びに板書することで、言動の意図やその時の気持ちを比較して考えられるようにする。</p> <p>◆おおかみの2つの言動を比較しながら考え、言動の意図やその時の気持ちの違いに気付いている。(発言) → どうしてそうしたのか、何のためにそうしたのかを問い、2つの言動の違いが明確になるようにする。</p> <p>○「おおかみが変わったのはどうしてでしょう。」</p> <p>3-(2) もし、くまと出会っていなかったらどうだったかを問い返すことで、他者からの親切が自分を変えるきっかけになったということについて実感できるようにする。</p> <p>3-(3) 似た経験を問い、自分と重ね合わせられるようにする。</p> <p>○「親切にしてよかったと思うことはありますか。」</p> <p>4 親切な言動によって誰が嬉しくなるのかを問い返し、親切な行いは自他ともに嬉しくなるものだというを実感できるようにする。</p> <p>○「よいことをするのは、どうしてだと思いますか。」</p> <p>5-(1) 前時までの学習を想起させることで、よいことに関する共通点に着目できるようにする。</p> <p>5-(2) 3つの視点で自己評価をさせ、学びの自覚を促す。</p>

5 単元前の児童の様相

授業前に、「よいことって、どんなことですか。」と児童にたずね、ウェビングでまとめさせた(図1)。書いている言葉をすべて用いて、テキストマイニング(テキストデータから情報を抽出することの総称)で分析すると、以下のようなワードクラウドができあがった(図2)。

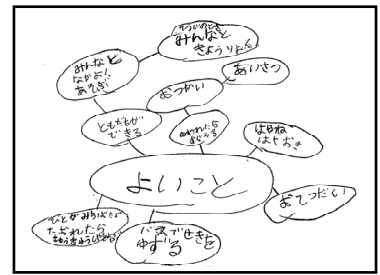


図1 児童のウェビング

これらの言葉をそれぞれ見ていくと、児童がどんなことを「よいこと」だと捉えているか、視覚的に理解できる。最も多かったのは「おてつだい」に関する事で、次いで「たすけあう」などの人とのかかわりに関することが多かった。ウェビングの内容や書いている量に個人差はあったが、一人一人が思う「よいこと」が書かれていた。それらを見て、本単元を通じて「よいこと」の意義を考えるとともに、どんなことが「よいこと」なのか、広がりが見られるような授業展開にしたいと考えた。

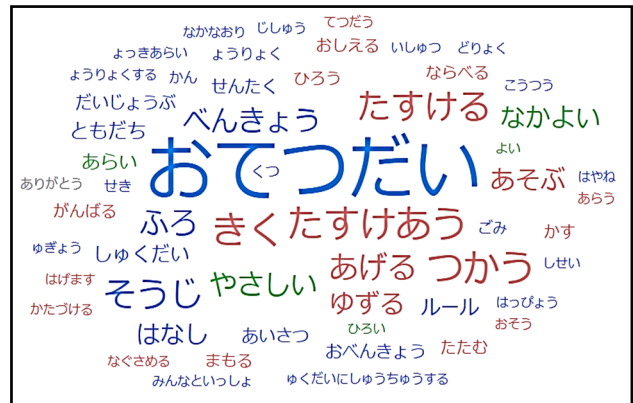
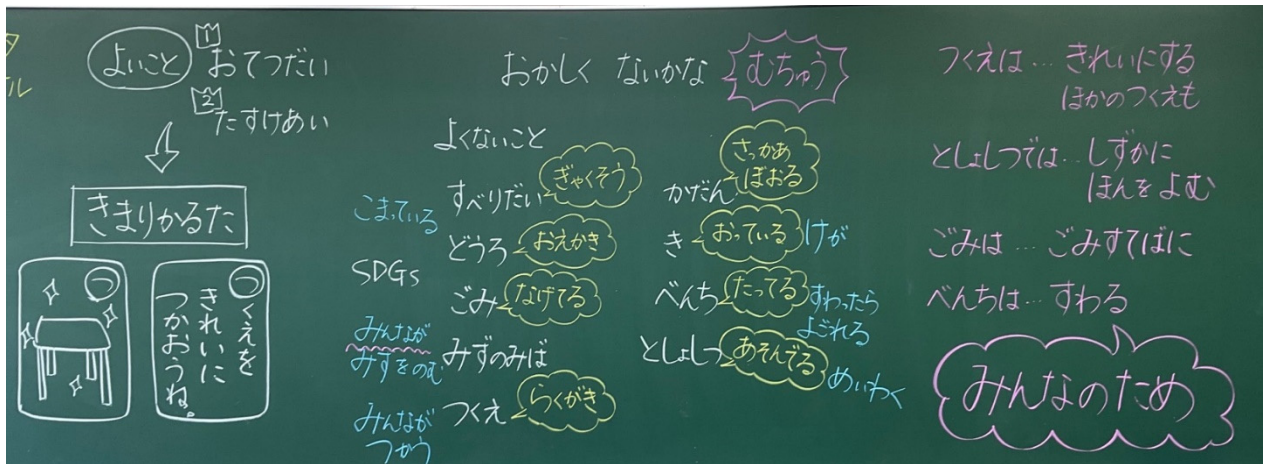


図2 ウェビングの言葉を抽出したワードクラウド

6 授業の実際

(1) 1時目の様相

1時目は「おかしくないかな(学研)」の学習である。ルールやマナーを守れていない様子を見ながら、身の回りにあるルールやマナーを想起し、ルールやマナーを守るよさについて考えた。



「どうしてルールを守るのかな。」と問うたところ、「みんなのためになるから」という答えが返ってきた。そこで「じゃあ、みんなのためになることって、くわしく言うとどんなこと?」と問い、「きまりかるた」をつくる活動につなげた。児童は思い思いの「よい行動」について考え、きまりかるたに表していた(図3)。できあがったかるたを交流しながら「かるたにあるようなことができる学校は素敵な学校だと思う。」という児童の発言をもって授業のまとめとした。振り返りで、単元前に書かせたウェビングによりことを書き足す活動を行った。

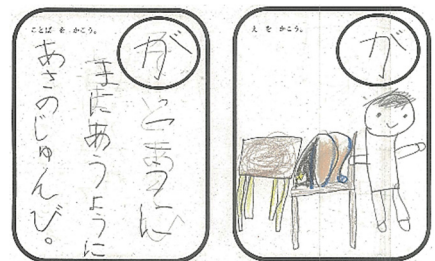
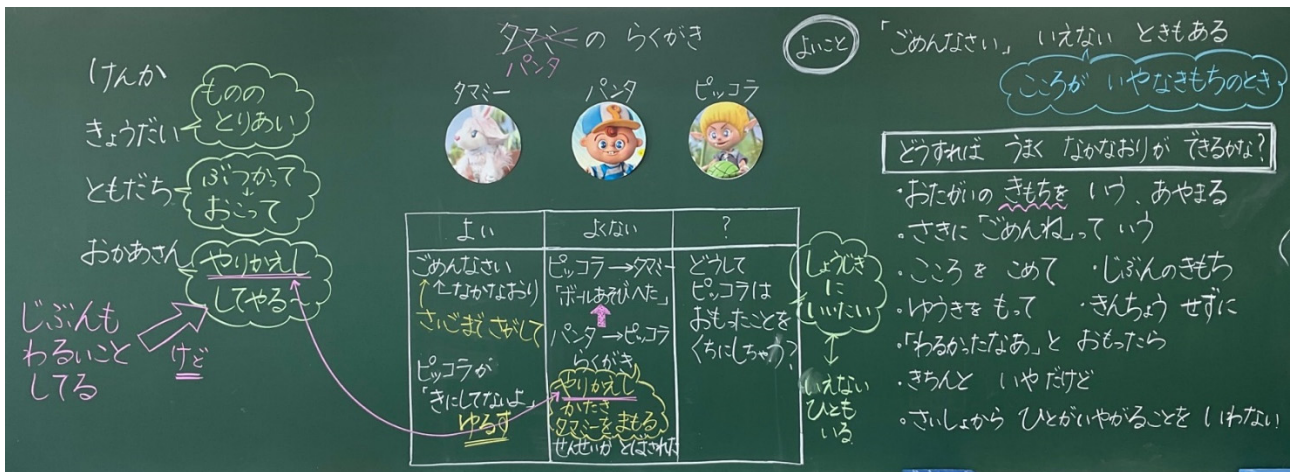


図3 きまりかるた

(2) 2時目の様相

2時目は「タマミーのらくがき」の学習である(7/19)。NHKforSchoolの動画教材を用いて学習を進めた。タマミーに対して心無いことを言って傷つけてしまったピッコラ。それに腹を立てたパンタは黒板にピッコラの悪口を書いてしまいます。もやもやしている3人はどうなるのか、といった内容の動画である。

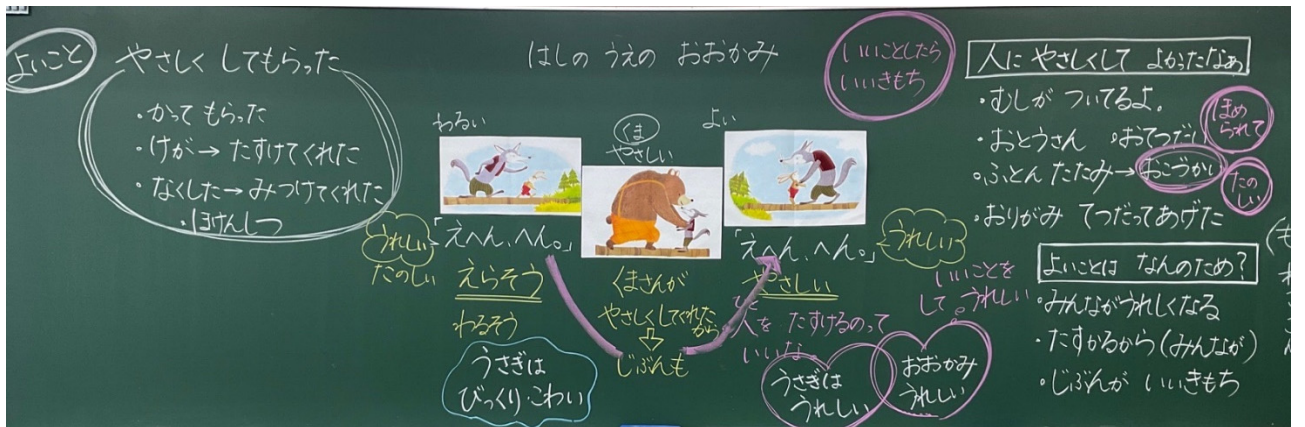


動画視聴後、「よいこと」「よくないこと」「気になること」の3つの視点から、登場人物たちの行動を分類していった。「けんかしても、お互い謝って仲直りするのはよいことだよ」という発言が出てきたときに「じゃあみんなはいつでも謝れる？」と問いました。ほとんどの児童が「謝れるよ！」と自信をもって答えていたが、数名「謝れない時もある。」と答えた。そこで、「謝れない時は、どんな時？」と尋ねたところ「心がもやもやしているとき」「嫌な気持ちの時」などの意見が出てきた。これらの意見をまとめながら、話し合いたいことを児童と検討する中で「どうすればうまく仲直りできるのかな？」という問いが出てきたので、課題として提示した。話し合った結果「お互いの気持ちを言う」「心をこめて謝る」「ゆきをもって自分の気持ちを言う」などの意見が出てきた。

1時目は「規則を守ることのよさ」、2時目は「友達とけんかした後、お互いに非を認めて仲直りすることのよさ」について考えた。どちらも「よいこと」というキーワードをもとにつないでいった学習である。本時も含めた3つの学習を通して、身の回りにはたくさん「よいこと」があつて、その積み重ねが自分たちの生活を豊かなものにしてくれるという実感をもてるような学習にしたいと考えた。

(3) 3時目の様相

3時目にあたる本時は「はしの上のおおかみ」の学習である。おおかみの変容やくまの親切を通して、親切にすることのよさについて気付けるような学習を目指した。



導入では、親切について考えたり、やさしくしてもらった経験を想起したりして学習を進めていった。展開では、2つの「えへん、へん。」を比較したり、オオカミの変容の理由を考えたりする中で、親切な行為が相手だけでなく自分も嬉しくなるということに気付くことができた。その後、人に優しくした経験を尋ね、様々な意見が出る中で、優しくする目的を問うたところ、「ほめられるから、おこづかいをもらえるから。」という他律的なものと、「いいことすると楽しくてすっきりする、いいことしたらいい気持ちになる」など、自律的なものが混在していた。それらについては特に価値付けることはしなかったが、優しくする目的については赤囲みでまとめていった。最後に単元のまとめとして「よいことは何のためにするのでしょう。」と尋ね、児童同士で席を立って話し合う「おさんぽタイム」を行った。全体で考えを出し合う際には「みんながうれしくなる」「みんながたすかる」「じぶんがいいきもちだから」などの意見が出された。授業後に、もう一度ウェビングに書き足す活動を行った(図4)。

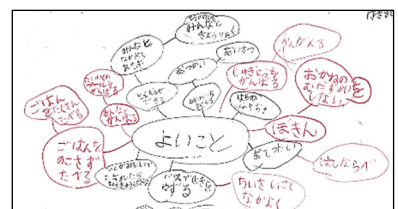


図4 単元後のウェビング

7 まとめ

(1) 成果

- ①授業を重ねるごとに、児童の「よいこと」に対する認識が広がった。3つの内容項目にかかわる形で「よいこと」をテーマとして考えたことで、すべての児童が当初描いていたウェビングに書き足すことができ、日常生活の中にある「よいこと」を意識化できるようになった。
- ②学習内容に関する「よいこと」だけでなく、日常生活の中で見つけた「よいこと」をウェビングに書く児童が出てきた。これは、学習を通して学んだことを、日常生活につなげて考えている姿だと考える。

(2) 課題と改善策

- ①3つの教材同士の関連付けや、それぞれの時間に何を学んでいくかという新規性が弱く、単元化の意義が薄れているのではないかと感じた。3つの学習のねらいを明確にするとともに、それぞれのねらいが児童の学びにどう結びついていくのかを検討する必要がある。
- ②「よいこと」に関する具体的な行為（バスで席を譲るのはよいこと等）と、概念（よいことは、自他ともにいい気持ちになる等）を結びつけるべきだった。そのために、もっと各時間で児童の実体験を引き出すとともに、それと教材とがどのように結びついているかを考える時間を設定する必要があると考える。

i 田沼茂紀(2017)『道徳科授業のつくり方 パッケージ型ユニットでパフォーマンス評価』東洋館